

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
教 義	2	1年 1・2・3類	必 修
授業担当者		教科書名	副教材等
****		「天理教教典」	「おてふり概要」「教祖冊子」

<p>科目の到達目標</p> <p>◎「天理教教典」第1章から第5章を通して、「天理教教義」の筋道を学び、教祖によって明らかにされた親神様の思召しを正しく理解する。第1章で教祖のお立場を正しく認識し、第2章で教祖によってお教え下された人類救済の方法である、「つとめ」と「さづけ」について学ぶ。第3章で第1章、第2章の元となる人間創造の根源たる「元の理」を理解し、第4章で人間創造の神である「天理王命」の人間世界に対する守護と親心を学ぶ。さらに第5章で教祖の「ひながた」こそ、教えの理想であることを認識する。</p> <p>◎「みかぐらうた」第1節から第4節と、第5節のうち1下り目から6下り目の「おてふり」を習得する。</p>

<p>評価の観点と方法について</p> <p>◎「天理教教典」を通して学んだ教えの筋道が、正しく理解できているか、教義（教理）の知識面を確認するとともに、教えを基にして物事を考え、日常生活の場で教えが実践できるかどうか確認。</p> <p>◎「おてふり」は各下り毎にテストを行い、教祖よりお教え頂いた「つとめ」を素直に、真剣にかつ正確につとめる努力を確認する。</p> <p>◎学期末考査(70点)と平常点(おてふりテスト・ノート、課題提出・授業中の態度等)(30点)により総合的に評価</p>

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一 学 期	4	*天理教の概説 ▼座りつとめ ▼よろづよ八首	*なぜ教義の授業を学ぶのか *本教の簡単な概説 ▼「つとめ」の重要性の認識 ▼基本の手・足の運び、地歌	*生きる目的（人生の意義） *親神様・教祖・立教・三原典などについての説明 ▼第1節から第3節までのお手振りを正確につとめる ▼繰り返し練習（正しい手振りと足の運び）《鳴り物を含む》 4～5時間（テスト含む）	▼「つとめ」に対する姿勢（地歌） ▼正しい手振りと足の運び・地歌
	5	*天理教教典について *教典第1章 「おやさま」	*教典の位置付け *教祖＝「月日のやしろ」である 教祖よりお教え下さる教えの目的と親心	*教典制定の経緯、三原典、前篇・後篇について *最初の啓示の理解（「おふでさき」1～3首） 「おふでさき」でお示し下さる「月日のやしろ」を正しく認識 教祖の親心の具体的内容（口・筆・自由自在の守護・身を以て行いに示す） 「神・月日・をや」「教祖存命の理」	*「元の神」「実の神」 「月日のやしろ」 「おふでさき」（たとえ）
	6	▼おてふり 「1下り目」	▼正しい手振りと足の運び	*教祖冊子を用いて補足説明する ▼繰り返し、繰り返し練習《鳴り物を含む》→3～4時間（テスト含む）	*自分にとって「教祖」とは ▼正しい手振りと足の運び・地歌
	7				

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント	
二 学 期	9	*教典第2章 「たすけ一条の道」	▼おてふり 「2下り目」	*人類救済の具体的方法である「つとめ」について学ぶ *人類救済の具体的方法である「さづけ」について学ぶ	*教祖が「つとめ」をお教え下さる思いと御守護の意味(史実にも触れながら) *教祖が「さづけ」をお渡し下さる思いと御守護の意味(史実にも触れながら)	*「つとめ」の意義 「つとめ」の呼称 *自分の「つとめ」に対する姿を確認 *「さづけの理」の意義 「よふぼく」の使命
	10	*教典第3章 「元の理」	▼おてふり 「3下り目」	▼正しい手振りと足の運び *「立教の3大いんねん」「つとめの理」が如何なる理に基づくのかを明らかにする ▼正しい手振りと足の運び	▼繰り返し、繰り返し練習《鳴り物を含む》→3~4時間(テスト含む) *人間創造の目的→「陽気ぐらし」 「立教の3大いんねん」→人間創造の時の「夫婦の雛型」との約束 「道具」「雛型」の引き寄せ→「つとめ人衆」の位置(かぐらづとめ) ▼繰り返し、繰り返し練習(扇)《鳴り物を含む》→3~4時間(テスト含む)	▼正しい手振りと足の運び・地歌 *「元の理」=象徴的説話 (たすけの理話) 「立教の3大いんねん」 「つとめ」=人間創造を今に再現するもの→守護
	11		▼おてふり 「4下り目」	▼正しい手振りと足の運び	*人間の宿し込みと産みおろし→「いちれつきょうだい」・「価値の平等」 人間の成人→「出直し」「親神様の御守護」 ▼繰り返し、繰り返し練習(扇)《鳴り物を含む》→3~4時間(テスト含む)	▼正しい手振りと足の運び・地歌 *「いちれつきょうだい」 「成人」=「たすけ」・「陽気ぐらし」 「だめの教え」
	12					▼正しい手振りと足の運び・地歌
三 学 期	1	*教典第4章 「天理王命」	▼おてふり 「5下り目」	*親神様の守護(十全の守護)と親心 ▼正しい手振りと足の運び *「天理王命・教祖・おははその理一つである」	*「元の神」・「実の神」→「眼に、身に、心にありありと感じることができる」 「十全の守護」→「この世は神のからだ」 ▼繰り返し、繰り返し練習《鳴り物を含む》→3~4時間(テスト含む) *これが信仰の根本である→「陽気ぐらし世界」の実現	*「元の神」・「実の神」 「十全の守護」を実感する→ 親神様の御守護 ▼正しい手振りと足の運び・地歌 *親神様の親心の認識
	2		▼おてふり 「6下り目」	▼正しい手振りと足の運び	▼繰り返し、繰り返し練習(扇)《鳴り物を含む》→3~4時間(テスト含む)	▼正しい手振りと足の運び・地歌
	3	*教典第5章 「ひながた」		*「ひながた(の親)」の理解	*「ひながた」50年を通してお示し下された親心	*「ひながた」の事実 「世界たすけ」の親心

その他 (履修上の留意点)

◎「天理教教典」をよく拝読し、毎時間ノートを必ずとること。(素直な心で、真剣に学ぶ)

「おてふり」は、「みかぐらうた」を歌って、陽気な心で勇んで練習させて頂きたい。

3類については、その習熟度を確認しながら進め、「おてふり」に慣れることを授業の柱としたい。